

石川三碧コレクシヨンの富岡鉄斎作品について ―山中信天翁・富岡鉄斎・石川三碧―

豆田 誠路

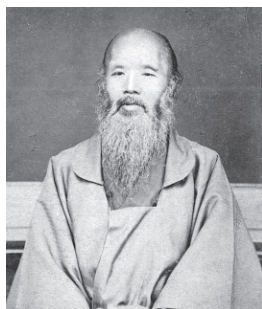
一 はじめに



石川三碧
(画像: 碧南市藤井達吉現代美術館蔵)



富岡鉄斎
(写真提供: 清荒神清澄寺 鉄斎美術館)



山中信天翁
(画像: 碧南市蔵)

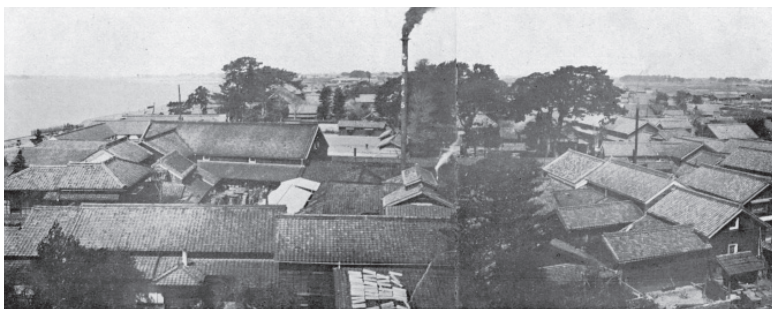
本稿は、二〇一四(平成二六)年一月に碧南市藤井達吉現代美術館に寄贈された石川三碧コレクシヨンのうち、富岡鉄斎作品における賛や箱書の記載内容を検討することによって、石川三碧コレクシヨンの富岡鉄斎作品についてその特徴を明らかにすることを目的とする。なお、このコレクシヨンにおける富岡鉄斎作品の一部については、二〇一三(平成二五)年十二月から翌年三月にかけて、碧南市藤井達吉現代美術館及び富山県水墨美術館(富山県富山市)において開催された展覧会「画人・富岡鉄斎展」で公開した。よって作品の画像及び賛の訓読の一部は『画人・富岡鉄斎展』カタログを参照されたい。

(一) 石川三碧コレクシヨンの概要

碧南市藤井達吉現代美術館所蔵の石川三碧コレクシヨン(一〇三点)は二〇一四(平成二六)年一月に寄贈された。このコレクシヨンは、現在の碧南市大浜地区で長く味淋醸造業を営む石川八郎右衛門家に伝来した作品群のことである。特に、同家二五代石川三碧(一八四四―一九二三)が関わった作品が大半を占めるため「石川三碧コレクシヨン」と命名された。

内容としては、三碧と親交があった近代最後の文人画家といわれる富岡鉄斎や、現在の碧南出身の文人で富岡鉄斎が兄事した山中信天翁の作品のほか、信天翁が箱書した木村兼葭堂や岡田半江の文人画などの作品、石川家にまつわる作品などである。形態としては、掛軸七七点、卷子九点、扇面四点、一双屏風一点、その他一二点となる。そのなかで富岡鉄斎作品(計二六點)は、石川三碧が富岡鉄斎との長年の親交により形成されたもので特記すべきものである。鉄斎は少なくとも一八八九(明治二二)年と一八九五(明治二八)年の二度、石川三碧邸に逗留している。またそれ以来三碧の還暦、古希、夫妻の金婚式など節目節目に、それらの祝いとして鉄斎が描いた画が、このコレクシヨンのなかに含まれている(後述する)。

特に《福祿寿図》《瀛州仙境図》は他の個人所蔵の《西王母図》と併せ、一九五五(昭和三〇)年に東京国立近代美術館で公開されて以来、五九年ぶりに「画人・富岡鉄斎展」で公開された貴重な作品である。



九重味淋醸造場(『愛知実業宝鑑』所収。明治時代後期(年未詳))
手前が九重味淋、奥の林が林泉寺。西に衣ヶ浦が広がる。

(二) 石川三碧と石川家

それでは、本稿の主題である石川三碧コレクションの富岡鉄斎作品について検討する前に、まずコレクション名のもとになった石川三碧とはどのような人物かを押さえておきたい。

石川三碧(一八四四―一九二三)は現在の碧南市大浜地区で長く味淋醸造業を営む石川八郎右衛門家の二五代目である。石川家は、一七代八郎右衛門^{のぶさ}信英が一九〇(天正一八)年の徳川家康関東移封に際し、妻の父で大浜郷の郷士である味岡八郎次正経より大浜郷の味岡家を継ぐことを頼まれ、これを承諾して以来大浜村に居住し、製塩業・金融業・廻船業の経営や、味淋・焼酎、清酒の製造業を営んだ。特に味淋は女性好みの甘い酒から江戸で人気の調味料になっていった。そのため、後に清酒業は廃業したが、三碧の頃には味淋業に専念していた。

三碧自身は、一八四四(天保一五)年正月四日生まれで、一八六八(明治元)年の家督相続時に八郎右衛門^{のぶゆり}信順を襲名、二年後に八郎治と改名した。その後、一九〇五(明治三八)年に家督を嗣子吉治に譲って隠居、二年後に雅号の一つであった三碧に改名が許可されている。そして一九二三(大正一二)年四月一四日死去した。ちなみに、富岡鉄斎は石川三碧より八年年長である。

なお鉄斎が九重味淋のことについて触れた作品では、『美淋酒之消息』(分類番号三・二)の共箱の箱蓋裏に

予之友人三河之石川三碧と云人九重と名つくる美淋酒を醸造するを業而(以下略)

と記し、また本紙には「うまぬさけ(酒)こころ(心)のま、の年わす(忘)れ」と鉄斎が詠むとおり、鉄斎も石川家を味淋醸造業の家として理解している。

(三) 石川三碧と富岡鉄斎に関する先行研究

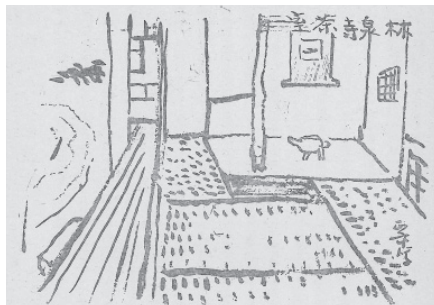
次に、三碧と鉄斎にはどのような関係があったのであろうか。これについては、富岡鉄斎の研究でも知られる洋画家正宗得三郎により纏められている。正宗は一九四一(昭和一六)年に鉄斎が逗留したことがある石川家の二七代石川八郎治氏(三碧の孫)と林泉寺の住職に面会して当時の様子を聞き取りし「大浜時代の鉄斎」という文章に纏めている。当時の雰囲気伝わる文章であるので、いささか長文であるが引用したい。

(石川)三碧は、明治二十二年ごろであったか、伊賀の上野に行った。そのころ鉄斎がそこに滞留して、荒木又右衛門の史跡や、芭蕉の遺跡などを訊ねたり、調査したりしていた。(中略)

鉄斎は三碧に「どうも、この土地では画を描く気にならない。どこか、落ちついて画を描くところはない



扁額「六謙庵」 1895(明治28)年 林泉寺蔵 富岡鉄斎が林泉寺・龍山禪師に贈ったもの。



林泉寺茶室(正宗得三郎『富岡鐵齋』90頁)

か」といった。「では、私の家に來られてはどうですか」と三碧が勧めたので、鉄斎は碧海郡の大浜へ来て、三碧の家に滞在した。石川丈山の遺跡を訪うたのも、この時代である。

この家の上に、林泉寺という寺がある。そのころの住職は竜光禪師^(山)であった。鉄斎は、いつとなく、その竜光禪師と懇意になり、碁を打ったりする間柄になった。

石川の家は商家であって室が狭かった。鉄斎は林泉寺の茶室に目をつけた。そこで自分をその茶室においてくれないかと禪師に頼みこんだ。禪師は快く承諾した。

それは四畳半の茶室である。西の方には大浜の海岸が見わたされる。鉄斎はここに移って絵筆を執り大浜の景色を袋戸に大和絵式に描いてある。(中略)鉄斎は、寺の茶室にいて、心のままに絵を描いていた。朝はいつも早く起床した。(以下略)

これによれば、一八八九(明治二二)年に石川三碧の邸に滞在した鉄斎は、滞在中隣りの林泉寺茶室にも逗留していたことが分かる。

また再び鉄斎が三碧邸を訪れたのは一八九五(明治二八)年とされる。正宗は平凡社版『鐵齋』のなかで次のように記す。

(明治二八年)十二月、再び大浜石川三碧氏を訪う。石川三碧は名古屋の田嶋、愛知県新城の鈴木氏と姻戚関係あり鉄斎は石川、田嶋、鈴木家と交遊あり、田嶋家に逗留して作画。(以下略)⁴⁾

また、それ以前の錦城出版社版『富岡鐵齋』の「鐵齋年譜」明治二八年の項に次のように記す。

十二月、碧海郡大濱石川八郎衛門(三碧)又林泉寺に滞在、揮毫せらる。⁵⁾

このように、正宗の調査によって、一八九五(明治二八)年にも鉄斎が三碧方を訪れたとみられる。それでは、三碧と鉄斎の関係は二人のみなのであるうか。その点について、正宗は次のように記す。

私が大浜時代と題したのは、大浜の石川三碧は、名古屋の田嶋五郎(健堂)愛知県南設楽郡新城町鈴木謙次郎(益軒)とは姻戚つづきで皆鉄斎と親しくしていた。私の調査では最初三碧が鉄斎を知り、これらの人々に紹介したのだと思う。そこでこの大浜が中心となつて、この地方に鉄斎が広まったのだと思うのである。それで仮に大浜時代として回想したのである。

このように、正宗によれば、名古屋の田嶋家、新城の鈴木家と石川家が姻戚関係にあり、鉄斎が石川三碧を通じ

て両家共に親交があったとみる。そして新城の鈴木鎌次郎宛富岡鉄斎書簡を紹介する。

例えば、一八八四(明治一七年)二月三日付け鈴木鎌次郎宛富岡鉄斎書状では、「御地之名産納豆」是迄ハ石川氏より折々拝受致、其後久々今回拝味仕候。」とあり、既に一八八四(明治一七年)以前に三碧が鉄斎に納豆の贈答を行うなどの親交があったことがうかがわれる。また一八九〇(明治二三年)六月三日付け鈴木鎌次郎宛富岡鉄斎書状⁸では、鉄斎が鈴木鎌次郎に、表装が落成した楠正成画像と横額《嵐山之図》を送るのに際に「三碧君へ相托し候。」とあり、また《西園雅集之図》も「やはり石川君へ差出ス方便宜ニ御座候哉。」とあり、鉄斎のもとから鈴木鎌次郎のいる新城に作品を送るのに、三碧のいる三河大浜を経由していることや、鉄斎が「石川君」「三碧君」と呼ぶ親しい間柄であったことが看取できるのである。

なお以上の先行研究のほか、富岡鉄斎自筆の「東游記事」に「(明治二二年)八月十一日、参河碧海郡大浜村石川八郎治、号三碧生家ニ寓ス(以下略)」とあり、一八八九(明治二二年)に石川三碧邸を訪問したほか、滞在中に碧海郡和泉村(現安城市和泉町)にある石川丈山邸跡を探訪し、また幡豆郡天竹村新波陀神社(現西尾市天竹町の天竹神社)を参拝、同社の額面をしたためていることも、この記事にある。

また碧南市藤井達吉現代美術館所蔵の富岡鉄斎《人物図貼交屏風》(分類番号「二〇」という六曲一双屏風は、新城の鈴木家旧蔵と伝えており、確かに鉄斎と新城の鈴木家の親交の痕がうかがえる。

このように、鉄斎は少なくとも一八八九(明治二二年)と一八九五(明治二八年)の二度、石川三碧邸に逗留しているが、それ以前から親交があったことをみてきた。それでは、第二章では、このような先行研究を前提としたうえで、石川三碧コレクションの富岡鉄斎作品についてみていきたい。

二 石川三碧コレクション富岡鉄斎作品

(一) 富岡鉄斎作品の概要

石川三碧コレクションの富岡鉄斎作品は二三件二六点あり、うち一八点が共箱該当作品となる。これを制作年月順にしたものが表1である。

先述のとおり、鉄斎は少なくとも一八八九(明治二二年)と一八九五(明治二八年)の二度、石川三碧邸に逗留しているが、一八八九(明治二二年)逗留時の作品が三点(1〜3)、その他は以後の交流のなかで形成されたものである。

例えば1から3の作品の賛には次のような記載がある。

1《高士肥遯図》「明治廿二年八月寓於石川氏水明樓早起寫此□似 樓主三碧盟臺乞正」

2《三獸饗帝釈図》「明治己丑孟蘭會日寫於三碧書屋」

3《大浜画賛》「参河大濱なる三碧うしを訪ひて、其家二十日ちよくもと、まりける二、そこを立いつるとて家のはしら二か、しむ(中略)時二明治はたとせ二ツ余りに八月」

一八八九(明治二二年八月、お盆の時期を中心に二〇日間程石川三碧邸を訪問し、水明楼なる室で寝起きし、早く起きては画を描いていたといった様子が現存の鉄斎作品の賛から伺える。

また石川三碧コレクションのうち広瀬惟然《俳句》(usc-8)、高芙蓉《山水図》(j-3)、田能村竹田《草に蜻蛉図》(g-h)の三点は、鉄斎自身が箱書したものである。広瀬惟然《俳句》の箱蓋裏には「為三碧雅契 鍊齋」とあるのみであるが、高芙蓉《山水図》の箱蓋裏の一部に「明治廿二年八月為 三碧盟臺御賞 鐵齋百鍊題」、田能村竹田《草に蜻蛉図》の箱蓋裏には「明治廿二年八月念二日觀畢而題 鐵齋散人於三碧書屋」とあり、一八八九(明治二二年八月逗留時にこれらの作品を觀て箱書したことを示す。

これ以後の石川三碧コレクション富岡鉄斎作品は、三碧の還暦、古希、夫妻の金婚式など節目節目に、それらの祝いとして鉄斎が描いたと先述したが、それを具体的にみていきたい。

5《老子過関図》は賛より石川三碧の「週甲子寿」つまり還暦祝いとして、7《古石長椿図》も賛より石川三碧の明年の古希祝いとして、8《和合万福図》《書翰紙 一卷》《和合図考》も賛より石川三碧夫妻の金婚式祝いとして描かれたことが分かる。さらに、14《瀛洲仙境図》・15《福祿寿図》は、他の個人所蔵(碧南市藤井達吉現代美術館寄託の《西王母図》と併せて元三幅対であるが、これらも《瀛洲仙境図》の賛より、石川三碧が八〇歳、夫人が七〇歳に達したことを祝って贈られたものであることが分かる。

つまり、大浜石川三碧邸に逗留した時だけでなく、鉄斎最晩年に至るまで石川三碧の節目節目の祝いに贈られ残されたこれらの作品は、石川三碧コレクションの核になる部分といえよう。

それ以外に、賛や箱書を検討することでみえてくるものがある。それは、作品の賛と箱書を共に制作年月順に並べると、作品の賛と箱書が同時期に書かれたものが少ないことである。

例えば、先述したとおり1から3の作品は一八八九(明治二二年八月の大浜逗留時に制作されたものであり、また8-1《和合万福図》は賛による制作年月が一九一五(大正四)九月で、箱書では翌年三月であり半年の差があるものの、金婚式の祝いとして描くという目的自体は同じなので同時期と見做して良い。ところが、4《大原売薪女図》は賛では一九〇二(明治三五)年一月制作であるが、箱書は一九二三(大正一二)年京都の鉄斎の宅・魁星閣に

て「再観」したとあり、二二年ぶりにこの作品に再会した鉄斎が箱書している。こうした「再観」は、一九二二(明治四五)年、一九一六(大正五)年の他、一九二二(大正一〇)年、一九二三(大正一二)年、一九二四(大正一三)年と鉄斎最晩年に多くなる。このことから、石川三碧は自身の為に描かれ手元にあったものを、本人または代わりの者が京都の鉄斎宅に持ち込み、鉄斎に箱書を依頼し、鉄斎もこれに応じた姿をみることができると推察される。

ただし、鉄斎の日常としてそのようなことが可能かも確認しておく必要がある。そこで鉄斎の孫富岡益太郎が後年述懐した文章から、その辺りの様子をみておこう。

(父謙蔵は)明治三十年代の終わりから祖父の仕事を手伝って家の事務を見ていた(中略)

大正四年、祖父は数え年で八〇になり、折から第一次世界大戦の好景気で、新画の大流行と祖父の長寿がめでたいということもあって、依頼者もいっそう多くなりました。(中略)父は鐵齋の健康を心配して、極力新しい依頼を断る方針をとり、そのため、一面識もない人からの贈物や、画の依頼と察せられる書留郵便や、無断で送ってくる鑑定、箱書依頼の荷物などは、即座にそのまま返送してしまいました。それでも依頼が減りませんので、(中略)画幅の大小に応じて最低の基準を定めたこともありましたが。(中略)

父が亡くなってからは母が代わって事務をとりましたが、依頼の範囲もできるだけ少なくし、謝礼も画を渡して後に受けるようにして、質素に暮らすこととしました。(中略)祖父は毎月必要な経費は分つていきますから、それに相当する点数の画を母に渡すと、後は自分の気のむくままに、人に贈る画などを描くのです。¹⁰(以下略)

こうした近親者の文章に接すると、鉄斎の子謙蔵が一九一八(大正七)年に亡くなるまでは、謙蔵が鉄斎への画の依頼に厳しく対応したこと、晩年は生活に必要な点数以上は、気の向くままに描いていた様子がつぶさにみとれる。それでも、鉄斎と三碧の長年にわたる親交の間柄であれば、三碧から箱書を依頼されてもそれに応えた、ということは可能であろう。

また、三碧は鉄斎から作品を寄贈されたり購入したりしている。

例えば、5《老子過関図》は一九〇四(明治三七)年三碧の還暦祝いとして描かれたことは既に触れたが、一九二二(明治四五)年に再観して書かれた箱書には「三碧盟契の還暦寿のため此を寫き以て寄贈して(以下略)」とあり、鉄斎から寄贈された作品であることが分かる。ところが、13《普陀落山觀世音菩薩像》は一九二三(大正一二)年四月に三碧の為に描かれたものであるが、軸装の裏に貼り付けされた紙に金一〇円でこの作品を描いたとあり、鉄斎から購入した作品であることが分かる。このことから最晩年に三碧が鉄斎より作品を購入したこと、最晩年

に鉄斎が若き日の自身の作品に箱書きしたことは関連があるのかもしれない。

以上から、石川三碧コレクション富岡鉄斎作品は、石川三碧と富岡鉄斎の長い親交を通じて、鉄斎よりの寄贈・購入により形成された、伝来履歴も明確な重要な作品群であることが分かる。

三 石川三碧と山中信天翁

なぜこれほどまでに石川三碧コレクションに富岡鉄斎作品があるのだろうか。第二章でみてきたように、三碧と鉄斎の間に直接親交があったことが明らかである。しかし、それだけでなくもう一人の人物が三碧、鉄斎それぞれに親交していたことが見逃せない。三碧と同じ三河国碧海郡出身で、幕末維新期の文人の山中信天翁である（ちなみに信天翁が三碧より二二歳年長である）。そこで、まず大正期に刊行された信天翁を顕彰する書籍『信天翁』から、既に知られている二人の関係を確認しておく。

（一）『信天翁』にみる二人の関係

石川三碧は一八六六（慶応二年）に山中信天翁の弟子になったが、実際に初めて信天翁に面謁したのは一八七四（明治七）年の秋という。¹¹しかし信天翁の日記では、それより少し前の同年六月から七月にかけて東浦の実家に帰省した折、同年六月二五日から二七日に信天翁が三碧邸を訪問している。

二十五日、大濱石川大沙を訪ふ。

二十七日、大沙を辞し、舟にて半田に赴く、中野半左衛門に宿す。¹²（以下略）

また同年秋に会ったというのは嵐山の紅葉と一緒に見に行ったことのように、日記の明治七年一二月に

六日、三河石川八郎治入京、家内一同嵐山に紅葉を見る、七分染む、大悲閣に登る、紅葉、至而佳矣。

七日、石川と浪華へ赴く。¹³

とあり、三碧が信天翁のもとを訪れた際、信天翁、遊可夫人（ゆか）と三碧が嵐山の紅葉を楽しみ、また翌日信天翁と三碧は大阪に行っている。

そもそも三碧の号も信天翁によるもので、某年某月二八日付け三碧宛信天翁書簡によれば、信天翁は碧水の意で「三碧」「三清」、楽水の意で「楽水」「楽軒」「三楽」を示し、これらから定めなさればいいかがか、と述べている。¹⁴

(二) 石川三碧コレクションの山中信天翁関連作品

次に、石川三碧コレクションの山中信天翁に関連する作品を山中信天翁の日記記事と照らし合わせながらみてみよう。

「信天翁日記鈔」(『信天翁』所収)によると信天翁は一八七四(明治七)年六月一日から七月二十四日まで故郷東浦に帰省した。帰省中は暮参のほか、半田の中塾半左衛門、小鈴谷(現常滑市)の盛田久左衛門、高浜の田島五郎作、西尾の深谷錦岳などを訪れている。また六月二十五日から二十七日まで石川三碧を訪れている。

この石川三碧邸滞在中に描かれたのが、山中信天翁『養老飛泉図』(図1)であり、作品の箱書もしている。

山中信天翁『養老飛泉図』では、本紙に

明治七年六月廿又七日寫并題二養老山舊作於三河大濱之水明樓上以贈玉輦親臨孝子会擬見當年旌賞典瀑泉如練桂晴空

とあるように、石川三碧邸の水明樓で描いた作品であるほか、伝大石良雄『書簡』(図2)の箱蓋裏には、「明治七年六月廿五日審定了謹書以為水明社兄 獻」と、頼山陽『竹石図詩』(図3)の箱蓋裏にも「明治七年六月廿五日題於水明樓上 信天翁獻」とあり、六月二十五日に伝大石良雄の書簡や頼山陽の作品を観て箱書したことが分かる。また『閑中今古帖』(図4)の画帖中に「明治七年六月廿又一日在於故郷之含暉樓上作此以為 古鈴詞契清鑿 信天翁獻」とあり、石川三碧邸訪問前の六月二日に実家の含暉樓で描いた画帖が三碧コレクションのなかに含まれていることから、制作後すぐに石川三碧に贈られた可能性がある。

このほか、頼山陽『七言絶句』(図5)の箱蓋裏に「此詩載遺稿人皆唱之(中略)甲戌六月 信天翁獻識」、扁額『弊之所生題壁二則之一』(図6)の本紙に「明治七年甲戌十一月廿又四日撰并書於糺林南莊之味水齋 信天翁獻」とあるように、三碧邸訪問前後の親交関係も伺える。

併せて、岡田半江『溪山梅林図』(図7)では、石川三碧宛山中信天翁書簡が同梱され、箱蓋裏に「辛巳七月□之筆 二(中略)信天翁題」と、十時梅厓『山水図』(図8)の箱蓋裏にも「予曾所藏今□為三碧社契之藏(中略)幸也喜題 辛巳七月 信天翁」とあり、一八八一(明治一四)年七月に信天翁によって箱書された作品があり、一八八一(明治一四)年段階での親交の痕が伺える。

四 山中信天翁と富岡鉄斎

(一) 鉄斎に画の道でたつことを勧めたとされる信天翁

このように、石川三碧は富岡鉄斎、山中信天翁それぞれに親交があったことをみてきた。それでは、山中信天翁と富岡鉄斎にはどのような関係があったのであろうか。

鉄斎は文久二年（一八六二）二七歳の頃、

聖護院村の蓮月旧居で私塾を開いたが、生活が苦しく画を描いて生計の助けとし、昼は画を描き、夜は読書して勉学した。

山中静逸、板倉（淡海）槐堂、江馬天江、藤本鉄石、松本奎堂、平野国臣等と交際、勤王のことを図る。

山中静逸は鐵齋が兄事した人で、書画詩文に長じ、篆刻にも巧みであった。鐵齋に画の道でたつことを勧めたのは静逸であったという。鐵齋は静逸より得るところが多かったようで、後々までも静逸の墓参を忘らなかつた。¹⁵

以上は、富岡益太郎編「富岡鐵齋年譜」文久二年の項を引用したものである。静逸は山中信天翁のもう一つの号である。鉄斎に画の道でたつことを勧めたのは信天翁であったとされるが、これについては小高根太郎が次のように言及している。

当時京都には、諸藩の浪人や郷士たちが続々と入りこんでいた。鐵齋は、これらの人々と往来して勤王のことを論じていたが、中でももっとも親しく交際したのは山中信天翁（静逸）・板倉槐堂（かいどう）・江馬天江・小野湖山などの文人で、とくに信天翁に親炙したらしい。（中略）絵をもって生活を立てることを鐵齋に勧めたのは、この人であると言われている。もっともこれには異説があつて、信天翁は鐵齋に画家になるなど言ったのだとも伝えるが、これは実は専門画工にはなるな、学者の余技としての文人画をやれと勧めたのに相違ない。¹⁶とにかく鐵齋の面倒をよく見たらしく、このころの鐵齋の詩には、信天翁に贈ったものがかなりある。（以下略）

以上二氏の見解が、いわゆる山中信天翁が後年近代最後の文人画家といわれる富岡鉄斎に画の道でたつことを勧めた、とされる根拠となっている。

(二) 史料にみる信天翁と鉄斎の関係

ここでは、それ以外に史料から信天翁と鉄斎の関係を確認していきたい。

ア 幕末における二人の関係―勤王の志により国事に奔走―

まず鉄斎自身が一八七七(明治一〇)年頃筆記したとみられる「一時漫録」には、安政年間における鉄斎と信天翁らとの親交を記す記述がある。

山中静逸、藤井竹外、梁川紅蘭、松本圭堂^(巻)、江馬天江、余及其外数名、夜明の比より北山ノ看花ニ赴キ、修学寺ノ瀑布一見ス、夫ヨリ山鼻ノ亭ニ燕飲ス、是日紅蘭子琴ヲ携フ、暫アリテ松本謙三^{圭堂}高声朗吟ス、花モ見タリ軍モシタリト、余問曰、花ハ今日既ニ観ルヲ得タリ、軍ハイツカスルゾ、謙三答曰、程ナク勤王ノ軍ノ先陣スベシト咲イ、大ニ愉快ノ事ナリ、薄暮雨ニ遇イ、各々鳥散ス、時安政三月廿二日也¹⁷

引用最後のとおり、安政年間(一八五四―六〇)のある年の三月二二日、鉄斎は山中信天翁他一〇人程で洛北にて花見をし、酒宴をしていたとある。但し年次について検討の余地がある。

まず年次の上限については、参加者のなかに梁川紅蘭の夫、梁川星巖の名がないので、梁川星巖が没した後の一八五九(安政六)年以降と考えられる。

また年次の下限については、一八六二(文久二)年かその翌年頃とも考えられる。前述の記録では、松本奎堂が「花も見たいし戦もしたい」と朗吟したのに対し、鉄斎が「花見は今日既にしたが、戦はいつするのか」と問い、奎堂は「程なく勤王の軍の先陣をすべし」と答えたというくだりがある。松本奎堂や藤本鉄石らは、一八六三(文久三)年八月に元侍従中山忠光を擁して大和五條で挙兵、戦死した(天誅組の変)。こうした切迫した当時の情勢を鑑みれば、この酒宴は鉄斎が後年安政年間と記したのは記憶違いで、一八六二(文久二)年かその翌年頃に催されたとも考えられる。

いづれにせよ、安政から文久年間に鉄斎は信天翁を含め勤王の士と親交があったことが分かる。次に、一八六三(文久三)年正月一〇日、鉄斎は山中信天翁夫妻と(京都郊外の)山端音羽滝に遊んだ。その時に詠んだ詩の添文と詩文には次のようにある。

癸亥孟春十日。偶静逸先生。有佳夫人。及余同欲見北山花音羽瀑。而一日之遊覽。至夕盡歡而帰。

途中得率口之詩兩三首焉。録以備他日之話柄云。

満逕青梅映白沙。聯吟勃窣夕陽斜。

折枝罷咎無情甚。雨慙風勝損華。
遙尋懸瀑到河源。御柳官梅修学村。
為伴嬉遊陶隱士。此間欲否設柴門。¹⁸

一八六三(文久三)年當時の山中信天翁の動向としては、同年三月に朝廷に置かれた国事御用掛の役人に建白書を提出する¹⁹、同年八月一八日の政変以後は曼珠院門跡の家臣を名乗り、修学院村に隠棲、密かに金銭を渡して志士の窮乏を救っていた。²⁰この七言律詩のなかに「修学村」「隱士」が出てくるが、鉄斎がこの詩を詠んだ約半年後に信天翁夫妻が修学院村で隠棲生活を送ることになることを暗示するような詩である。

また慶応年間のある時期に信天翁や鉄斎の身に身近に危険が迫ってきたから逃避の旅に出るということを大田垣蓮月に急報した手紙が知られている。

急迫一筆申入候。昨日、鳩居堂之同居之士矢野茂太郎見召捕。右ハ内密ニ勘候。是ハ浪士往来、且ツ勤王之議論より事起り候茂、右ニ付山本静逸翁、下拙等茂、遂ニ難免嫌疑、右禍起ラヌ先ニ暫ク他国江参り申可
と存候。(中略)

六日

大田垣蓮月様。²¹(以下略)

富岡猷蔵。

伊予国大洲藩出身の矢野玄道は京都の鳩居堂に寓していたが、その矢野が召し捕えられ、信天翁と鉄斎も嫌疑を免れないので暫く他国へ参りたいと記す。手紙の年次は矢野玄道の逮捕時期から一八六五(慶応元)年のものと考えておきたい。²²

信天翁は一八六五(慶応元)年頃、京都郊外の岩倉村に隠棲していた岩倉具視のもとを訪れるようになっている。その信天翁と鉄斎が非常に近い関係にあり、特に勤王の志が強く国事に奔走していたことが分かる。

イ 斎藤拙堂題讀《月ヶ瀬図巻》にみる京都文人サークルの一員

ところで次の作品も参考になる。斎藤拙堂題讀《月ヶ瀬図巻》(公益財団法人大和文化財保存会所蔵)である。

この図巻は、長さ五九・二センチメートルに及び、巻頭に津藩の儒者斎藤拙堂の「文久紀元春三月・溪山清夢・拙堂隱士」の書があり、以下に尾山の梅林溪谷の光景四場面が間隔を置いて配置され、その絵の間に諸文人の讀文がみられる。諸文人とは、「松寓学人」、藤井竹外、村山半牧子、藤本鉄石、富岡鉄斎、「仙心道人」、「静慎室之主」、

「邨子毅」、山中信天翁、江馬天江、神山鳳陽、頼立斎となつてゐる。²³これら筆跡者に富岡鉄斎、山中信天翁が含まれ、幕末の京都文人世界の一端が垣間見える作品である。なお、斎藤拙堂は信天翁が京都へ上る前に入門した人物であり、村山半牧子・藤本鉄石は信天翁が京都で親交を持った人物である。その証拠として村山・藤本双方から落款に「山中先生の為に」と書す作品が残されている。²⁴

ところで、この作品の制作年については明らかではない。ただ作品中の斎藤拙堂の書は「文久紀元春三月」（一八六一（文久元年））である。このことに関連して、この作品について詳細に検討された田中久和氏の論考によれば、「仙心道人」なる人物が七絶に続く款記を記しているが、この文言の検討から制作年を推定している。まず、その款記の一部には次のようにある。

弘化嘉永之誤 録之日萬延

庚申之抄冬 静文主人病眼乞

余之診語 遂及梅花 与余同

僻 亦有月瀬之行 後出此卷 求一詩

余題二首 而誤書紀號甚矣

余之心病 尚欲薦於眼病（以下略）

田中氏はこれを次のように解説した。

先に「弘化」と記したのは「嘉永」の誤りである。いまこれを書いているのは「萬延庚申之抄冬」であり、「静文主人」が眼病をわずらつて「余」に診察を乞うたとき、梅花について話が及び、「余」と「同癖」とわかつた。そこからかつて「月瀬」に遊ぶことのあつたこともわかつた。のちに「静文主人」がこの巻を出してきて一詩を求めたので「余」は二首を題したもの、しかし年号を書き誤るということをしてしまった。「余」の「心病」は（静文主人の）眼病よりもひどいようである。²⁵（以下略）

「仙心道人」なる人物が「萬延庚申之抄冬」つまり一八六〇（万延元年）一月にこの款記を書いた点に田中氏は注目し、この作品の巻頭にある一八六一（文久元年）に書かれた斎藤拙堂の書より前に、この書画卷の体裁がある程度できあがつていた、とされた。²⁶

これと併せて田中氏は、「仙心道人」なる人物に「一詩」を書くよう勧めた「静文主人」なる人物に着目する。先の解説により二人の関係は眼科医と患者であるが、この「静文主人」なる人物が既に書画卷の原型にあたるものを所

持し、「仙心道人」なる人物に詩を載せるように求めているからである。

この書画巻の制作に関わる「静文主人」なる人物について、村上泰昭氏は「巻頭と巻末並びに絵画を最初に企画の上、その間に関係者の讃文を依頼した」「通常の文人ではなく、やはり勤王思想の持主であったと考えられる」とし、田中氏は断定こそしないものの信天翁である可能性が高いことを示唆している。²⁸

本稿で殊更この「静文主人」にこだわるのは、「静文主人」が静逸すなわち信天翁ではないかと強く感じるからである。例えば、この書画巻には藤本鉄石と鉄斎の漢詩が収められているが、この藤本鉄石とも信天翁は近かった。鉄石の所用印の原鈴印譜である《鉄寒士印賞》が一八七二(明治五)年に鳩居堂主人・熊谷直孝編によって冊子となっているが、この跋文を信天翁が寄せている。

このように、師斎藤拙堂をはじめとして村山半牧、藤本鉄石、富岡鉄斎らと交わっていた信天翁は、この書画巻制作にあたり重要な人物である「静文主人」であると考えるのである。また断定できなくても、この書画巻から幕末期に山中信天翁が京都文人サークルの主要な人物の一人であることを物語っているといえよう。

ウ 明治初期に深めた親交

年号が明治となり、鉄斎が描き信天翁が題詩を書き、信天翁が描き信天翁が題した作品がある。《信天翁・鉄斎・蓮蟹画讃》(辰馬考古資料館所蔵)という作品である。²⁹第一幅は鉄斎が蓮の画を描き、信天翁も題詩する。第二幅は、信天翁が蟹の画を描き、鉄斎が題している。

また鉄斎が一八七一(明治四)年に信天翁の為に描いた作品がある。《済勝余興図・漫遊所見図》(清荒神清澄寺所蔵)という折帖の作品である。³⁰そのうち《済勝余興図》の跋文には

余嘗所経歴名山大水写。以寄似信天山中先生并乞大政。

辛未杏花月。辱交。富岡鍊拝。

訓読

余嘗て経歴する所の名山大水を書き、以て信天山中先生に寄せ似し、并せて大いに政を乞う。

辛未杏花月。辱交。富岡鍊拝。

とある。また《漫遊所見図》の跋文にも

余好遊歴。此帖乃写其所見也。写畢并識。

寄呈信天先生悟下乞正。辱交。 鉄斎百鍊。

訓読

余は遊歴を好む。此の帖は乃ち其の見る所を書く也。書き畢り并せて識す。

信天先生悟下に寄呈し正を乞う。辱交。 鉄斎百鍊。

鉄斎は一八五八(安政五)年頃に越前・若狭・丹後等に数か月旅行したのを皮切りに、北は蝦夷(北海道)から南は鹿児島まで全国各地を旅行した。この作品が制作された一八七二年当時でも既に「遊歴を好み」その見た所を画題に信天翁を意識して制作したことが分かる。

また鉄斎の日記には、一八七四(明治七)年一月「十日、山中静逸翁之使者来、有鶏卵之賜」とあり、信天翁より鶏卵を頂戴しているし、同月「廿三日、訪山中静逸翁、置酒歓娛」とあり、鉄斎が信天翁邸を訪問して遊興している。このほか、一八七五(明治八)年に鉄斎が吉野山に花見に行った際には、信天翁と江馬天江、神山鳳陽、岡本黄石らと行ったことが、鉄斎自身が書き記した冊子に書かれている。このように、信天翁と鉄斎の親密な関係がみとれる。信天翁は一八八五(明治一八)年に数え六四歳で亡くなったが、鉄斎は信天翁の墓参を怠らなかつた。例えば一九〇〇(明治三三)年五月二二日には南禅寺天授庵にて信天翁ら亡友の墓を巡拝したほか、翌一九〇一(明治三四)年四月、信天翁の一七回忌に際し、日本南画協会第八回展に絹本淡彩十六羅漢図を出品した。また一九〇五(明治三八)年一月には信天翁とその夫人の霊牌を南禅寺天授庵に納め、祠堂料として大雅堂の「墨梅図」二幅、光琳書簡と「光琳別荘図」を合装した幅を納めた。³⁵

さらに、一九一七(大正六)年には鉄斎自ら信天翁三三年祭を行った。鉄斎筆録「無用之用」のなかに次のようにある。

大正六年五月廿三日。故山中獻。號信天翁丁三十三年祭。其髮塚南禅寺塔頭天授庵。為供養新建塔婆。謙蔵携香資。余詣午前十一時也。³⁶

このように、信天翁と鉄斎は幕末から長く親交があり、また信天翁没後も信天翁の墓参を怠らない強い関係が結ばれていた。

五 おわりに

石川三碧コレクションのなかに《素園石譜》という和綴本がある。明の林有麟が一六一三（万暦四一）年に著した、一〇一の名石等を収録した画譜の書写本である。注目すべきは帙の見返し部分である。ここには「明治十九年六月静逸翁小祥忌後購之 鐵齋山人識於桃華書院」とあり、信天翁の一周忌の後に富岡鉄齋が購入したことが分かる。この和綴本がその後、石川三碧のもとにあったことから、山中信天翁・富岡鉄齋・石川三碧三者の関係が垣間見える資料である。

本稿は、碧南市藤井達吉現代美術館が寄贈を受けた石川三碧コレクションのうち、特に富岡鉄齋作品の特徴を明らかにしようとした。鉄齋作品における賛や箱書の記載内容を検討し、石川三碧と富岡鉄齋の長い親交を通じて、鉄齋より寄贈・購入により形成された、伝来履歴も明確な作品群であることを明らかにした。ただ、二人の直接の関係だけでなく、もう一人の人物、山中信天翁の取り結ぶ縁がこのコレクションの背景にあることを指摘した。いささか信天翁と鉄齋の関係を詳述したが、コレクションの背景にある人脈の一端を明らかにしたつもりである。

（註）

- 1 中日新聞社、二〇一三年。なお展覧会は、原田平作氏（大阪大学名誉教授）監修のもと、碧南市藤井達吉現代美術館・富山県水墨美術館・中日新聞社による企画運営、鉄齋美術館の協力のもと開催した。
- 2 九重社史編纂委員会編『三河みりんのふる里 九重味淋220年史』（石川八郎右衛門、一九九七年）、原田信男編『江戸の料理と食生活』（小学館、二〇〇四年）一〇六―一〇七頁
- 3 正宗得三郎『鐵齋』（平凡社、一九六一年）。なお、初出は正宗得三郎『大演時代の鐵齋翁』（『富岡鐵齋』錦城出版社、一九四二年）。平凡社版は錦城出版社版の内容を若干修正している。
- 4 正宗得三郎『鐵齋』（平凡社、一九六一年） 三二二頁
- 5 正宗得三郎『富岡鐵齋』（錦城出版社、一九四二年）二二五頁。この明治二八年の鉄齋再訪について、岡島良平氏は「明治廿八年再訪のことは、鉄齋年譜にはない。しかし寺傳にもあり、この正宗の記は正しいと思はれる。」とする本人記載のメモによる。
- 6 4文献 三四五頁
- 7 4文献 四〇一頁
- 8 4文献 四〇三頁
- 9 鉄齋美術館編『鉄齋研究』七二（清荒神清澄寺、二〇〇九年）
- 10 富岡益太郎『祖父鐵齋の思い出』（『鐵齋大成』二、講談社、一九七六年）。初出は小高根太郎編『富岡鐵齋』（日本美術新報社、一九六〇年）。
- 11 『国香余芳』（三）翁の諸譜（信天翁）信天会、一九一五年
- 12 『信天翁日記鈔』明治七年六月二十五日条、同月二十七日条（信天翁）信天会、一九一五年。
- 13 『信天翁日記鈔』明治七年二月六日、同月七日条（信天翁）信天会、一九一五年。
- 14 『信天翁』（信天会、一九一五年）一八九―一九〇頁
- 15 富岡益太郎編『富岡鐵齋年譜』（『鐵齋大成』第四卷、講談社、一九七七年）
- 16 小高根太郎『富岡鐵齋―その生涯と芸術』（『鐵齋大成』第一卷、講談社、一九七六年）三四二頁
- 17 富岡鉄齋『一時漫録』（鶴田武良編『鐵齋筆録集成』第一卷、便利堂、一九九一年）
- 18 4文献 四二二頁

- 19 「議奏雜記建白書抄録」(国立公文書館蔵)。画像は「歴史系企画展 没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」(碧南市教育委員会文化財課、二〇一五年)三四頁参照
- 20 一八八五(明治一八)年に東京品川・海晏寺に建てられた「信天翁山中先生之碑」(品川弥二郎撰文の碑文より。碑文の画像は「歴史系企画展 没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」(碧南市教育委員会文化財課、二〇一五年)四頁が参考となる。
- 21 清荒神清澄寺蔵。『鉄斎研究』一〇(鉄斎研究所、一九七三年)所収。画像・翻刻・解説あり。小高根太郎氏の解説ではこの書状を「慶応四年某月」とする。
- 22 梶岡秀二「伊予と鉄斎をめぐる四題 ―矢野玄道・富岡春子・予州滞在・天野方壺」(『富岡鉄斎展 あるコレクターが見た画業七十年』有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク、二〇〇三年)では、景浦雅桃、矢野玄道先生に就て「(伊予史談)九一、一九三七年」を引用し、矢野玄道が逮捕された年を根拠に、この手紙を慶応元年のものとする。
- 23 『(財)大和文化財保存会収蔵品目録―書画編―』(財)大和文化財保存会、一九九四年(四六―四七頁、九一頁(解説・村上泰昭氏))
- 24 「歴史系企画展 没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」(碧南市教育委員会文化財課、二〇一五年)五四・五五頁参照
- 25 田中久和「幕末期における富岡鉄斎の一事蹟について ―斎藤拙堂題貫月瀬図巻を中心に―」(『美術科学研究』二二、大阪教育大学・美術教育講座・芸術講座、二〇〇五年)
- 26 25に同じ。
- 27 23に同じ。
- 28 25に同じ。
- 29 『鉄斎研究』五八(鉄斎研究所、一九八一年)二
- 30 9文獻 ― 賛文・訓読はこれに従った。
- 31 富岡鉄斎「日記(明治七年)」(鶴田武良編『鐵齋筆録集成』第一卷、便利堂、一九九一年)
- 32 富岡鉄斎「吉野山花見」(鶴田武良編『鐵齋筆録集成』第一卷、便利堂、一九九一年)
- 33 15文獻 三六六頁
- 34 4文獻 四四九頁
- 35 4文獻 四五〇頁、15文獻 三七二頁
- 36 4文獻 三二九頁
- 37 画像の一部は「画人・富岡鉄斎展」(中日新聞社、二〇一三年)七六頁

(付記)本稿は、二〇一三(平成二五)年二月から翌年三月にわたり碧南市藤井達吉現代美術館と富山県水墨美術館において開催した「画人・富岡鉄斎展」及び二〇一五(平成二七)年一月から三月にわたり碧南市藤井達吉現代美術館で開催した「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新展」の展示作品調査の過程で明らかになったことを纏めたものである。その折ご協力賜った所蔵者並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。

石川八郎右衛門

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

林泉寺 住職 丹羽康道

湯浅大司 (敬称略 五十音順)

特に、石川三碧コレクションについては、碧南市藤井達吉現代美術館で作品調査を実施した。本稿はこの調査結果の一部を改めて検討したものである。そのため、作品調査にお立会いいただいた所蔵者をはじめ、作品調査とその取り纏めに関わった関係各位に厚く御礼申し上げる。

【日時】二〇一三(平成二五)年四月一五日、五月六日

二〇一三(平成二五)年二月三日、二月二四日、七月一四日

【関係者一覧】(職名は当時)

館長 木本文平	係長 山本貴史	学芸員 豆田誠路	臨時職員 安藤里恵
副館長 岡崎康浩	学芸員 土生和彦	学芸員 鐔本悠子	臨時職員 村松信子

表1 石川三碧コレクション 富岡鉄斎作品一覧

番号	作品名	員数	制作年月	材質技法	形態	寸法	分類番号	図版番号	賛解説掲載頁
1	高士肥遯図	一幅 共箱	一八八九(明治二二)年八月	絹本着色	軸装	一四五・三×四二・七	i:29	9	87
2	三獣饗帝釈図	一面	一八八九(明治二二)年八月	紙本着色	扇面	一六・二×四七・二	i:27	8	87
3	大浜画賛	一幅	一八八九(明治二二)年八月	紙本着色	軸装	一三八・三×四七・〇	i:30	10	87(一部)
4	大原壳薪女図	一幅 共箱	一九〇二(明治三五)年一月	紙本着色	軸装	九六・〇×五四・五	i:36	27	無(89)
5	老子過関図	一幅 共箱	一九〇四(明治三七)年五月	絹本着色	軸装	一四四・三×五〇・二	i:33	30	90
6・1	寄楽之絵巻	一卷 共箱	一九一二(明治四五)年頃	紙本着色	卷子装	一九・八×一〇二・七	i:do-3	無	無
6・2	山竹軼事帖	一冊 共箱	(年未詳)	紙本着色	折本	一五・〇×六・〇×二・〇	i:28	無	無
7	古石長椿図	一幅 共箱	一九一二(大正元)年一〇月	絹本着色	軸装	一二八・九×四二・六	i:35	35	91
8・1	和合万福図	一幅	一九一五(大正四)年九月	絹本着色	軸装	一三八・八×四一・八	i:38	37	91
8・2	書翰紙	一卷 共箱	一九一六(大正五)年	紙本着色	卷子装	二七・一×五八・九	i:do-4	無	無
8・3	和合図考	一卷	一九一五(大正四)年九月	紙本着色	卷子装	二五・三×二五七・五	i:39	38	91(一部)
9	遊魚図	一面	一九一六(大正五)年	紙本淡彩	扇面	一六・二×四七・二	i:26	41	91
10	美淋酒之消息	一幅 共箱	一九一六(大正五)年	紙本着色	軸装	三六・二×四九・六	i:40	無	無
11	茶僊陸桑亭図	一幅 共箱	(年未詳)	紙本淡彩	軸装	七二・七×三三・八	i:25	47	無(93)
12	茶旗「喫茶去」[淪心原]	二点	一九二二(大正一)年四月	絹に墨書	幡	三七・八×二八・〇／ 三七・七×二八・四	i:sc-16	48	93
13	普陀落山觀世音菩薩像	一幅 共箱	一九二三(大正一二)年四月	紙本着色	軸装	一一一・三×三二・七	i:32	51	93
14	瀛洲仙境図	一幅 共箱	一九二三(大正一二)年一月	紙本着色	軸装	一一一・二×五三・二	i:37	53	94
15	福祿寿図	一幅 共箱	一九二三(大正一二)年一月	紙本着色	軸装	一一一・二×五三・二	i:41	54	94
16	耶馬溪図・宝珠川図	双幅 共箱	(年未詳)	絹本着色	軸装	各一四三・八×一八・四	i:23	55	無
17	純君子図巻	一卷 共箱	一九二四(大正一二)年	紙本着色	卷子装	三五・四×六五四・六	i:42	56	94(一部)
18	漁鼓	一点 共箱	(年未詳)	竹	竹筒	七二・八×一二・三	i:c-1	無	無
19	醉余墨戲	一幅 共箱	(年未詳)	紙本着色	軸装	一三八・四×五一・六	i:34	無	無
20	巖に浪図	一幅	(年未詳)	紙本着色	軸装	三三・五×四六・〇	i:24	無	無
21	石川三碧宛富岡鉄斎書簡	一卷	(年未詳)	紙本着色	卷子装	一八・六×二一〇・四	i:do-5	無	無
22	石川三碧宛富岡鉄斎書簡(一一通)	一卷	(年未詳)	紙本着色	卷子装	一六・五×一〇八六・二	i:do-6	無	無
23	鉄斎先生画文聖星図封皮	一式	(年未詳)	紙に版	封筒	一九・七×七・八	i:pp-1	59	95

※番号の枝番号は同一の箱に収められていることを表す。

※図版番号とは『画人・富岡鉄斎展』で掲載した作品の図版番号のこと。

※賛解説掲載頁とは『画人・富岡鉄斎展』の『作品解説』で紹介した、解説した賛の掲載頁のこと。

【釈文】共箱作品の箱書

〔釈文の校正には、清荒神清澄寺 鉄斎美術館のお手を煩わせました。記して感謝申し上げます。〕

6 「奇楽」二字

〔6・1 奇楽之絵巻、6・2 山竹軼事帖を収める〕

〔箱蓋裏「奇楽」

〔箱蓋裏〕

〔余與三碧盟兄相知最久矣。見餽余其家釀有數余感。其厚意而余謝無物姑贈此帖以表感佩之意。但慚未足當大觀也。 明治辛亥十一月寒氣襲人僅呵手尚書。 鐵斎外史識。〕

1 高士肥瘠図 (cat.no.9)

〔箱蓋表〕「高士肥瘠圖」

〔箱蓋裏〕

〔書畫均是存今性靈之具也。故其心高即書畫亦高其心何書畫。亦俗矣心跡遂不可掩見其書畫。可以知其人也。此圖為三碧盟臺作之盟臺以為如何。 鐵斎百鍊并識。〕

7 古石長椿図 (cat.no.35)

〔箱蓋表「古石長椿圖」

〔箱蓋裏〕

〔大正五年三月 老友參之石川三碧翁令其家僕携來為題簽於是乎書。 九々齡 鍊斎。〕

4 大原壳薪女図 (cat.no.27)

〔箱蓋表〕「大原賣薪女圖」

〔箱蓋裏〕

〔大正十二季十月再觀併題於平安城内魁壘閣。 鐵斎時年八十有八歲。〕

8 和合万福図 (cat.no.37)

〔箱蓋表「和合萬福圖」

〔箱蓋裏〕

〔為老友石川三碧盟兄。寫祝其金婚式。 大正五年三月匣成之日。 鐵斎自識。〕

5 老子過関図 (cat.no.30)

〔箱蓋表〕「老子過關圖」

〔箱蓋裏〕

〔余向為三碧盟契還曆壽寫此以寄贈而。今日再觀。時屈指明年盟契當遇古稀壽矣。余將復有所賀。余即今年七十有七。情出往事相與各祝其長命云。 明治四十五年三月。 鍊斎外史并題簽。〕

10 美淋酒之消息

〔箱蓋表「美淋酒之消息」

〔箱蓋裏〕

〔指物匠菊齋主人風雅之情あり。予平素所用之木具にて大抵同氏之所作也。此書牘文ハ予之友人三河之石川三碧と云人九重と名つくる美淋酒を醸造するを業而。予二一年中贈り來具一報を菊齋ニ贈る。其添文を粗末ニせずにて感心して此二記。 鐵斎八十一翁。〕

11 茶徳陸桑亭図 (cat.no.47)

〔箱蓋表〕「茶徳陸桑亭圖」

〔箱蓋裏〕

〔余曾為石川三碧翁寫此。屈指殆垂三十年。可謂古矣。翁并余今日尚長生無事豈可不謂幸哉。縱觀久之題一言云。 大正十年六月。 八十有六叟 鐵斎。〕

13 普陀落山觀世音菩薩像 (cat.no.51)

〔箱蓋表〕「普陀落山觀世音菩薩像」

〔箱蓋裏〕

〔此幅大正十二年四月十二日寫。以吊三州石川三碧翁也。 六月再觀題。 鐵斎百鍊。〕

〔軸裏貼紙〕

〔謹吊三碧居士歸函併供 觀世音菩薩像壹軀。 金拾圓也。 大正十二年四月十五日。 富岡百鍊拜。 石川家御中。〕

14 瀛洲仙境図 (cat.no.53)

〔箱蓋表〕「瀛洲仙境圖」

〔箱蓋裏〕

〔大正十二季六月自題簽。為參州石川氏。 八十有八翁 鐵斎外史。〕

15 福祿寿図 (cat.no.54)

〔箱蓋表「福祿壽圖」

〔箱蓋裏〕

〔大正癸亥歲六月自題簽於無量壽佛堂。為三河石川氏。 八十有八叟 鐵斎鍊。〕

16 耶馬溪図・宝珠川図 (cat.no.55)

〔箱蓋表〕

〔寶珠川圖 雙幅

耶馬溪圖 〕

〔箱蓋裏〕

〔大正十三季五月再觀并題。 八十有九叟。 鐵斎。〕

17 純君子図巻 (cat.no.56)

〔箱蓋表「純君子圖卷」

〔箱蓋裏〕

〔大正甲子暮鐵斎題自題於魁壘閣。 時年九十也。〕

18 漁鼓

〔箱蓋表〕「漁鼓 摹造心越禪師所將來」

〔箱蓋裏〕

〔心越禪師能鼓七絃琴俗弟子枚浦琴川傳琴法又傳漁鼓之法云。 鐵斎外史題簽并識。〕

19 醉余墨戲

〔箱蓋表「醉餘墨戲」

〔箱蓋裏〕

〔余嘗赴東京之途次迂路過參河大濱港訪石川三碧兄留滯數日酒間揮筆為樂焉。此幅即一時墨戲素不足觀而今日再觀。謝社盟之厚意余深慚輕率之筆云。 鐵斎外史。〕